

10

日本バプテスト連盟ホームレス支援特別委員会
ニュースレター

幸いなるかな、貧しき者よ

奥田知志（東八幡教会）

「君と出会ったのは寒さが残る3月の小倉駅だった。長身でおしゃれな出で立ち。一見野宿には見えない。「もし失礼だったらごめんね。君今晚行くところあるの」と語りかける。うつむいた首を横に振る。「どこかに泊まって、ともかくご飯を食べなさい」と持ち合わせを幾らか渡す。郷里には両親がいると言う。だが「帰れない。これ以上親に迷惑をかけたくない」と彼は言うのだ。29歳だった。

2008年リーマンショック以降、若年野宿者としてしばしば出会うようになった。それまでは50～60代の方々が主だった。どの年代であっても野宿状態は楽なものではない。ただ人間60年も生きていればそれなりの経験を積まれているようで、最悪の状況に置かれながらも比較的「落ち着いておられる」方が多かった。語弊のある表現かも知れないが「これまで生きてきた」という自負のようなものを持っておられるように感じた。

しかし、今路上で出会う若者たちは、まさに「これからの人」であって先が長い。その分喪失感も大きく絶望が深い。あまり聞かなかった一言をしばしば耳にするようになった。「もう死にたい」。私たちが運営する支援施設は、入所二カ月待ちの状態が続いている。早急に次の施設を準備する必要がある（現在募金中）。ここ数年、緊急避難として途切れることなく若者たちが教会で暮らしている。そこから巣立った人も少なくない。

現在の経済状況では、彼らがもう一度立ち上がろうと努力しても「かつてのよう」にはならないだろう。高度経済成長期、努力すればなんとかなった。だが有効求人倍率が0.5を割っている現状は、いわばイス取りゲームのイスが足りない状態である。そうであるにも関わらずイスに座れない人をつかまえて自己責任だと言う。今後景気がある程度回復しイスが再び出てくる時は来るだろう。しかし、以前のような「固定椅子（終身雇用制）」はもう出てこない。いわば「折りたたみイス（非正規雇用）」であって、再び景気が悪くなるとすぐに片づけられてしまう。若者たちの未来は厳しい。

今、私たちは方向転換（悔い改め）を求められている。戦後私たちは、「満足」を求めて努力を重ねてきた。結果、80年代には「総中流意識」にまで

至った。しかし、今や終身雇用制は崩壊し、今後低成長時代が続くことは確実である。だからこそ私たちは、ここで「満足と幸福」に対して懐疑を持たざるを得ない。「果たして満足と幸福は同じなのか」。「満足できないと幸福になれないのか」。「そもそも戦後社会が追い求めた満足は幸福だったのか」。私たちは根本的に問わねばならない。

「満足できなくても、人は幸福に生きることができる」。決して宗教的ごまかし（アヘン性）ではない。確かにキリスト教に限らず多くの宗教は、天国を約束することで現実の矛盾を曖昧にする危険を常に持っている。そんな危険を冒しつつあえて言う。満足と幸福は違うのではないか。これは、今日状況において教会が真剣に取り組むべき宣教課題だ。

主イエスはルカ福音書6章においてこう述べられた。「幸いなるかな、貧しき者よ」。にわかには信じ難い。しかし、この言葉の意味を、今若者たちと噛みしめている。これまで私たちは「貧しいことは不幸だ」と思い、必死に努力し「満足」を求めた。確かに貧困は問題。その惨状を20年間路上で見してきた。だが今このみ言葉が深いところで響いている。「幸いなるかな、貧しき者よ」。幸福と満足は違うのではないか。たとえ満足できなくとも人は幸福に生きるのだ。イエスは、どんな思いでこのことを語られたのか。どんな人々がその言葉を聞いたのか。そんなことを考えながら路上の若者を訪ねる夜が続いている。

あの日以来U君から毎日連絡が入るようになった。わずかに繋がった細い絆を少しずつ紡いでいった。「今日親に連絡してみました。帰ってこいと言ってくれました」と泣きながら電話があったのは、二週間後のことだった。翌日小倉駅で彼を見送った。別れ際「最初に会った夜、君に尋ねたことを覚えているか」と尋ねてみた。「覚えています。『君、死にたいのか』って奥田さんは聞かれましたよね。」「本当のところどうだったの」とさらに聞く。「実は、あの夜死のうと思っていました。あの日遭ってなければ僕は今ここにいません」。それが最後の一言だった。

今も時々電話がある。明るい声に励まされている。再就職も決まり頑張っている様子。一度彼を訪ねようと思う。あのイエス・キリストことばの意味を確かめるために。

ホームレス支援特別委員会 シンポジウム2009報告

今年2月8日～10日にかけて、大久保教会と連盟事務所を会場とし、ホームレス支援特別委員会シンポジウムが開催されました。テーマは「貧しき者は幸いか？」です。初日は大久保教会にて講演をふたつ頂きました。月曜日にもかかわらず、70名以上が参加してくださいました。それほど、現代の教会にて貧困問題は大きなテーマであることを、教会で生きる中で具体的に知る方が多いのだろうと思われました。

初日夕方の講演者は奥田知志牧師（東八幡教会）です。奥田先生は、自己責任論を強調する社会は、実は社会が責任を取らないことを同時に表明していることでもあり、それは無責任社会である、と言われました。そして、赤の他人が赤の他人のために動くのが社会であり、人は社会でのみ生きられることを教えてくださいました。その中で私の耳に強く残ったのは、「人は一人では生きられないし、生きてはいけない」という言葉です。後半の「生きてはいけない」はひとつの決断であり、主が伴われることを信じる私たちだからこそ、信仰そのものであると思いました。

奥田先生の講演後、大久保教会のみなさまが心を込めて用意してくださったカレーをみんなで食べました。集まる人のために食事を用意される人がおられ、その食事をみんなで食べることができるのも、当委員会の大事にする神の恵みであり、それを今回も実感しました。大久保教会のみなさまと河野牧師ご一家に、この場をお借りして心から感謝申し上げます。

そして夜の講演者は星野正興牧師（教団松崎教会および南豆教会牧師）です。星野先生は「貧しき者たちは幸いである」との主イエスの説教を、時代背景から丁寧に深めてくださいました。そしてこの主の言葉は、時代状況の中で決定的に貧しくさせられ、そこから脱出する術もない人たちに対して、主

がまさにこの言葉どおりでありそれ以外ではないというかたちで宣言されたゆえ、貧しき者たちは即幸いである、と語ってくださいました。人間の認識における幸福を完全にひっくり返す主の宣言こそ、すべての時代の私たちに必要であることを痛感しました。

同時に当委員会は、ホームレス当事者の生活する都市部の状況と聖書を対話させるかたちで、キリスト者としての行いを選び取って参りましたが、（また、バブ連の教会の99%は都市部にありますが）、今回、星野先生は都市部に搾取されるゆえに貧しくされ、そこから抜け出す可能性も見えない農村部の状況と聖書を対話してください、先生から今後教会が丁寧に考えねばならないテーマを与えられた思いであります。

二日目のシンポジウムも、連盟の部屋がいっぱいになるほどの参加者がありました。その中に少年少女隣人に出会う旅に参加され、その後大学生となられた仲間が2名がおられるなど、青年の参加が多かったことはうれしかったです。今後生きる社会が貧困状況にあることを若者こそ身をもって知っているゆえのことと思いました。

シンポジウムは二つのテーマで行われました。午前は「教会の課題としてのホームレス問題」というテーマで、麦野達一牧師（伊集院教会）、野口哲哉牧師（当時岐阜教会）、大谷（京都教会）が、それぞれの教会の具体事例を通して発表し、みんなで議論をしました。その中で確認できたのは、教会は、貧困社会の中で、誰でもホームレスになる可能性があることと、助け合う人間関係を喪失しているという意味でのホームレス問題はすでに教会にあることを認識しつつも、（つまり、ホームレス問題は現在と明日の教会の問題であることを知りつつも）、しかし、ホームレス当事者と出会うときに、大きな壁が教会に存在することも告白するしかないということでした。このあたりが今後10年のすべての教会のテーマになるのだろうと思いました。

午後は前日の講演と同じく「貧しき者は幸いか？」というテーマで、高市和久牧師（市川八幡教会）、村上千代姉（浦和教会）、松藤一作牧師（福岡西部教会）より発表をいただき、みんなで議論をしました。そこでは、貧しさは自己責任ではなく、むしろ社会構造の中でつくられていることが確認されました。またその中で村上姉は、社会構造の中で女性が小さく貧しくされてきた歴史を忘れるべきでないことを語られました。

最後に、各地域における支援状況の分かち合いにおいて、新たに支援を始めた教会があることを喜び、今後も共にホームレス問題を担う宣教の業に励みたいと願いました。また青年層の支援への参加が増えていることも喜びです。シンポジウムの場を備えてくださった主に感謝しつつ。



星野正興師

【シンポジウム参加者の声】

今回私は初めてこのシンポジウムに参加させていただきました。「貧しき者は幸いか？」というテーマのもと講演と聖書研究、現場の教会からの報告、討論が行われ、私たちは聖書からどのようなメッセージを受け取るのか。そして何を土台としてホームレス支援を行っていくのが問われたと同時に、今までの教会や個人の働きを振り返り、共有し、それらがそれぞれの教会や個人の今後の働きに、新たな力を与える豊かな学びと交わりの時となったのではないかと感じました。

また今回のプログラムを通して、現代社会の中で私たちはどこでイエス・キリストと出会うのが問われていると思いました。講演や聖書研究で話されていたようにイエスは最も貧しい者と共に歩まれ、ご自分も最も貧しくなられました。そしてその極みが十字架の出来事でした。イエスは復活された今もこの社会の中で、貧しき者たちと共に苦しみや悲しみ、困窮を抱えて生きている。それは路上であり、私たちが生活しているすぐ近くかもしれない。私は貧しき者たちの中に生きるイエスとの出会いを求めて生き、関わることをあきらめてはいけないと改めて学びました。そして現在の社会や経済システムの中で生きている自らのあり方を省み、貧しき者が絶対的に肯定される神の国を祈り求めつつ、この社会を変革していく業に参加していきたいと思いました。

(京都教会 南部真希子)

ホームレス支援特別委員会は、「人間も、教会も社会的な存在であり、社会の係わり合いの中での、信仰告白と福音の伝道が求められている」という思いの中にいる一人として、いつか参加したいと思っていた集会でした。

奥田知志先生の「現代の二つの貧困」では、「自己責任」という言葉によって、社会から切り離されてしまう人々の現実を知り、ホームレス支援とは、実に、「他者との関係で生きる。共に生きる。」ことを、教会が受け止めていることであると学ぶことができました。

星野正興先生の「貧しい者は幸いか？」は、聖書の中で語られる貧しい人は、その当時の大土地所有者に虐げられ、小作農民から更に転落した人々を指していたこと。それでもなおイエス様は、「幸いである。」という宣言をなさったことに、日本の農家の不安定な立場や、貧困に向かっても、教会が語るべき言葉があると希望をいただきました。

本当に多くの恵みの体験をしましたが、就寝前に、各教会での、「ホームレス支援」という課題を、自分自身の事として語ってくださった人々と話すことができたことが、最高の恵みでした。 教会が、

ホームレスの方々と出会い、共に歩み続けている現状をお聴きしたり、リーダーとしての牧師の働きが失われていくことへの不安と、教会がどのように課題に取り組もうとしているかの現状をお聴きすることができました。課題は大きく、教会も社会的な存在と言っても、教会が、その地域に在ることの意味を問い直していかなくてはいけないと宿題をいただきました。

(筑波教会 武林真智子)

『「ホームレス」と教会』の感想が届きました。
(上) 本田哲郎さん (下) 関田寛雄さん

こんばんは。
「ホームレス」と教会の出版
お返事は誠にありがとうございます。
新著を送ってくださり。
ありがとうございます。
この機会に、心で読んでくださる
方を福音の力でお支えさせていただきます。
ありがとうございます。
登壇 本田哲郎

主の平安をお祈りいたします。
この度は、『ホームレスと教会』の御出版をお祝いすると共に、私にまでお送り下さりありがとうございます。ぜひ読んで頂きたい。
現在、日本社会の格差の予備と典型的に表わして下さるがホームレスの存在です。この際、苦しい部分にこそあり、悲しみを合せているキリスト教会は、バプテスマを授けられたばかりか、この地獄からこそ力強い、日本社会を変えていく力があることを思っています。地の塩、世の光として、教会の使命が、いよいよ世にこそ導き出すように、お祈りいたします。

長崎・ホームレスを支援する会の活動報告 長崎バプテスト教会 宮本鷹明

長崎の活動の始まり

長崎で組織としてのホームレス支援活動は2009年2月に北九州ホームレス支援機構の森松先生をお招きしての講演会からスタートした。これから歩みだす準備をするための講演にも関わらず約100名もの方は駆けつけて下さり、30名の方々が呼びかけに応え、ボランティア団体として「長崎ホームレス支援を準備する会」の活動が始まった。現在は、2009年10月より「長崎・ホームレスを支援する会」として活動している。

活動内容

カトリックを含めた長崎市内の諸教会にお弁当を作ってもらい、週に一度滞在しておられる場所に訪問し、お弁当を渡してお話している。毎週約10名の方にお会いしており、聞くところによると、市内には30名ほどいるそうである。いくつかのコースに分かれ、お弁当配りを行い、固定した人が継続して関わり、関係を築きあげていながら活動を行なっている。まだ歩みだしたばかりの組織のため、一つ一つ会のみんなで話し合い、勉強し、新たな取り組みとして対応している。

長崎教会の取り組み

長崎教会としては月に一度お弁当作りの役を担い、活動に大勢参加している。自立し一人暮らしをしている元ホームレスの方が長崎教会の近くに住んでおり、教会をホームとして受け入れてもらえるように関わりを続けている。

活動の課題

会員個人の学びの機会を持つことと、まだ小さい組織であるため、基盤を固めることが大切である。さらに、金銭面の問題はあつものの緊急宿泊施設の必要性を強く感じており、一つの大きな目標である。また、長崎教会としてはどのような支援を行っていくことが出来るのか、これからさらに話し合っていく必要がある。

ホームレス問題有志の会

目白ヶ丘教会 田中秀幸

目白ヶ丘教会のホームレス支援活動は現在、NPO法人TENOHASIの活動現場に間借りする形で行われています。TENOHASIは東京都池袋地域でホームレス支援活動をするNPO法人です。教会内で献品と献金を募り、集められた物資とお金をNPO法人TENOHASI経由で路上生活者の方がたに提供させていただいています。また、夜回りの現場にはほぼ毎週、牧師、副牧師の他、数名の教会員が参加し、野宿者に僅かでも実際に関わるように努めています。

(特定非営利活動法人TENOHASIホームページ
<http://tenohasi.org/>)

今後は近隣の他宗派教会や連盟の教会、企業等との連携も模索しつつ、NPO法人TENOHASIの活動に関わることを軸にホームレス支援活動を継続してゆく予定です。NPO法人TENOHASIを資金面で支えるより効果的な方策を模索し導き出すことも今後の課題です。

活動の略年表

2009年4月26日(日)

壮年会にて 坂内孝雄(NPO法人TENOHASI副事務局長兼理事)講演「ホームレス状態の人々の実態とその支援活動」

講演に先立ち4月11日(土)NPO法人TENOHASIの炊き出しに教会員6名が参加 於南池袋公園(坂内孝雄氏は08年10月5日より礼拝出席する求道者)

4月29日(水)

目白ヶ丘教会から1名がNPO法人TENOHASIの夜回りに参加(以降ほぼ毎週当教会から1名以上がこの夜回りに参加している)

6月28日(日)

松田俊介・坂口昌彦・田中秀幸・坂内孝雄4名にて「ホームレス支援有志の会」が発足 献品とカンパ献金、活動参加者を募る。

集められた献品とカンパ金はNPO法人TENOHASIに送る(以降、ほぼ毎月ごとに献品とカンパ、活動参加を呼びかけている)

9月20日(日)

会の名称を「ホームレス支援有志の会」から「ホームレス問題有志の会」に変更

12月27日(日)

年末年始のホームレス支援活動である「NPO法人TENOHASIの越冬活動」への参加者を募る。「越冬活動」に当教会から古賀公一牧師、松永九実子副牧師を含む4名が参加(以降、古賀牧師、松永副牧師他が当有志の会の会員に)

2010年1月

当教会の両牧師もNPO法人TENOHASIの夜回りにほぼ毎週参加へ。

NPO法人TENOHASIから複数名が礼拝、祈禱会に出席するようになる。

2010年2月

日本バプテスト連盟ホームレス支援特別委員会主催のシンポジウムに当教会から両牧師のほか教会員1名と求道者2名が参加

NPO法人TENOHASIの活動への参加者が増え始める。

以上

ホームレス支援特別委員会 フィールドワーク

テーマ「貧しき者は幸いか？パートII ~ 貧困時代にわたしの教会は何を託されている？」

地球全体が総貧困と言っても過言ではない時代を迎えたわたしたち教会、キリスト者は、主イエス・キリストから何を託されているのでしょうか？すでに半世紀前から貧困問題に現場で取り組まれている方々からお話を伺い、わたしの教会でこの時代に何ができるのか？を一緒に考えていくことができると願っております。ぜひご参加を。

日程：2011年2月7日（月）～9日（水）

場所：洋光台キリスト教会、横浜寿町他

宿泊：洋光台教会：横浜市磯子区栗木1・2・2・3

費用：全日程参加 5,000円

初日のみ参加 1,000円（少年少女以下は無料）

二日目のみ参加 3,000円

*遠方の方には、交通費補助があります。食費は個人負担となります。

7日（月） 会場：洋光台教会

15時 受付開始
16時 開会礼拝
16時45分 各地報告
17時30分 夕食
19時 基調講演
講演：渡辺英俊牧師
（日本基督教団なか伝道所）
21時 終了

8日（火）フィールドワーク寿町

9時 洋光台教会出発
10時 寿町フィールドワーク
12時 昼食
13時 講演
講演：三森妃佐子さん
（日本基督教団寿地区センター代表）
15時 シンポジウム
テーマ「わたしの教会にできること」
17時30分 交流会
（夕食を囲みながら）
21時 洋光台教会到着

9日（水）会場：洋光台教会

9時 拡大委員会
11時30分 閉会礼拝
12時 解散



2008年フィールドワーク
炊き出しの準備

問い合わせ先：

大谷心基（日本バプテスト京都教会）

電話 075（231）1351

ファックス 075（231）4327

メール shinki@d3.dion.ne.jp

【ホームレス支援委員会で、抱樸館福岡を見学】

6月14日開催のホームレス支援特別委員会にて5月に開所したばかりの「抱樸館福岡」を見学に行きました。この施設は「第2種社会福祉事業無料低額宿泊施設」として認定されたもので、社会福祉法人グリーンコープが出資者となり、全国からの募金で、福岡市博多区に新築されたものです。この抱樸館福岡の計画から土地探し、交渉、運営にはNPO法人北九州ホームレス支援機構（奥田知志理事長）が深く関わっています。以下、抱樸館福岡のパンフレットです。一部を紹介します（転載の了解をいただきました）

1) はじめに - 自己責任論社会を超えて

2008年秋のリーマンショック以来、世界は大きな経済危機に見舞われています。100年に一度の事態の中で困窮状態に追い込まれる人々は後を絶ちません。

完全失業率は4.9%(2010年2月現在)と高い水準のままです。派遣等非正規の不安定な就労状況に置かれた人々が仕事と住まいを一度に失う事態が続いています。

この危機の中でホームレス状態に陥る人々、また自殺に追い込まれる人々が増え続けています。「自己責任論」が言われる時代にあって、一切の責任が「個人」に矮小化されていきます。その結果「社会の無責任化」（社会には助ける責任がない）が進んでいます。

私たちは、人がどのような困難に陥ったとしても、もう一度立ち上がることができる社会でありたいと思います。社会はそのために存在しているのです。社会福祉法人グリーンコープは、この社会が「責任ある社会」であり続けるために困窮者に対する支援体制を整えたいと思い、抱樸館福岡を建設しました。

2) 目的と働き

困窮者が抱える困窮の中身は、第一に物理的困窮です。私たちは、それを「ハウスレス状態」と呼んできました。安心して住める住居の確保、健康維持、就労のための様々なサポート、そして地域生活へと移行した後も続く支援。抱樸館福岡の第一の使命は、この「ハウスレス状態（物理的困窮）」からの脱出です。

しかし、彼らが抱えているもう一つの課題があります。それは関係に於ける困窮です。彼らは住まいと職を失っているだけでなく、関係や絆を失っています。私たちは、それを「ホームレス（関係的困窮）」と呼んできました。抱樸館は、人と人との絆を結び直す場所となりたいと思います。

3) 施設と主な支援の内容

定員は81名。入居期間は原則6か月です。全個室(約四畳半。国の基準の約2倍)。3食付き。風呂、食堂兼ホールのなどの付帯設備も充実しています。

入所時に生活保護を申請し、生活の基盤を整えます。その後、健康回復や就労のための職業訓練、また自立のためのプログラムが準備されています。就労し一定の給料が取得でき、移居の準備が整えば地域住宅へ移ります。当然居宅設置のための支援などもあります(保証人提供や家財確保など)。障がいをお持ちの方、高齢等で

働くことのできない方は、手帳取得や介護申請などの支援を行った上で地域移行を支援します。

川沿いという立地にも恵まれ、地域の方々との交流等もできるように、一階には地域交流スペースとして喫茶室を完備しています。明るく、元気の出る地域生活・福祉の拠点となる施設にしたいと思います。

4) 事業主体と協働体制

社会福祉法人グリーンコープが事業主体です。グリーンコープは生活協同組合として活動して参りました。現在の組合員数は40万人。このグリーンコープ共同体に社会福祉法人は所属しています。

さらに事業の推進に関しては21年の実績を持つNPO法人北九州ホームレス支援機構が協働事業者として全面的に協力します。

5) スタッフや職員の体制

施設長1名、生活相談員8名、事務員1名、調理スタッフ6名、宿直2名の18名の体制を準備しております。24時間スタッフが常駐します。

6) これまでの取り組み 巡回相談事業

2008年9月より福岡市内の巡回相談事業を開始し開所に備えて来ました。既にアパートに入居された方は50名を超えています。今後は、抱樸館を活用することによって、より効果的な支援の体制が組まれると期待されます。

また自立後のアフターケアの拠点施設としての役割も担います。

7) 自立支援から人生支援へ

野宿状態からの自立を支援することは大切です。しかし、私たちは、自立支援に止まらず人生そのものに対する継続的支援を目指します。ホームと呼べる関係性・絆を創造する。それが人生支援です。持続性のある伴走的な支援体制をもって出会いから看取りまでを想定した支援プログラムを実施します。

8) 地域づくりへの参加

当面の支援対象者は、路上に追いやられた人々、経済的困窮の中で住まいと職を失った人々です。しかし、私たちの目指すのは地域づくりです。多の津地区は、これまで様々な地域活動が活発に行われてきた地域です。私たちは、今後この地域の中で地域福祉の一端を担う施設として地域づくりに参加したいと思います。

「困窮・孤立」が、現在の困窮者が抱える問題の中身です。経済的困窮状況から脱するのみならず、孤立状態を終わらせるためにこの施設が活用されることを願います。

「自己責任論」の中で多くの人々が孤立状態に置かれました。「助けてと言えない」。それが問題を更に深刻化させています。「困った時は、抱樸館へ」。「助けてと言え」 - それが社会が社会である所以です。抱樸館は、まさにこのような「社会の存在意義」を明らかにする場所でありたいと思います。

9) 社会協働の拠点

困窮は、すでに一部の人の問題ではありません。終身雇用制が縮小され、非正規雇用が拡大する中で困窮や、困

窮になる恐れのある人々は増大しています。この問題に対応するためには、国や地方行政、福祉団体、企業、地域、ボランティアなど広範な協働体制が必要となります。抱樸館が、ホームレス問題、困窮者問題の地域協働の拠点となれることを願います。国、福岡県、福岡市などとも連携して課題に当たることを目指します。

10) 入居から自立までの流れ

入居受付

↓ 困窮者本人からの相談。各生活保護課窓口相談された方や、他支援団体が行う炊き出し場所等で入居希望者を募集

面接・聞き取りによる選考

↓ 複数回の面接により、自立の意思等を確認、聞き取り調査票の作成

*****抱樸館福岡*****

入居(生活保護申請)

↓ 他支援団体・福岡市等と連携しながら、自立計画を立案。入居時面接、オリエンテーション、入浴、健康診断等を実施

自立支援プログラム

↓ 住所(住民票)設定・病院受診・年金調査・就労支援、貯蓄など。自立支援プログラム(地域清掃プログラム・体操プログラム・音楽セッション・各種ミーティング・セミナー等)家族関係回復支援・帰郷支援

就労を支援する場合。

入居して3ヶ月以内には、就職が決まるよう目標を設定。

- (1)入居 求職活動準備・病院受診・履歴書の書き方、面接指導・資格取得支援
- (2)入居2ヵ月後 就職決定
- (3)入居2~5ヶ月後 就労の継続支援・給与の貯蓄(転宅費用積立)

アパートなどの次の住まい探し

↓ 地域の不動産会社との連携、保証人バンクの利用

出発式

↓ 地域の方やボランティアによる祝福・励ましのときを持つ

*****抱樸館福岡*****

自立(地域生活への移行)

相互扶助や社会資源の活用によるアフターフォロー
*地域社会での生活に移行しても、相談・支援できる仕組みづくり

11) 自立支援プログラム

野宿状態からの自立には単に居宅支援と就労支援だけではなく、生活やメンタル面に関する支援が必要です。抱樸館では、自立支援プログラムを実施し、退所後の自立生活に向けた準備を行います。具体的には、体操プログラムや音楽療法プログラム、依存症セミナー、就労支援セミナーなどです。

12) 契約に基づく支援とケアプランの作成

入所者との間で文書による契約書を作成し相互の了解の元に支援(入所)が始まります。また一人一人にケアプランを作成し自立に向けた支援を行います。ケアプランの作成には福祉事務所のケースワーカーとの意見交換を重視します。



抱樸館の玄関。入り口の看板は金芝河氏の筆。



川が見える眺めのよい食堂。地域の方が立ち寄れる場所あり。



事務室の中にある「在室表」「ただいま」「おかえり」の声をかけあえるように。



完全個室。テレビは共有スペースのみ。居間で団楽するイメージです。

【抱樸館福岡を見学して】

5月18日からの1ヶ月足らずで、定員81名のところ、27名が入所されており、事務所には毎日問い合わせの電話がかかってくるそうです。中には「長崎なんだけど」という遠方からの入所希望や、「息子の友達が困っている」という相談、明らかに障害を持っていると思われる人が相談相手がわからず野宿になってしまうケースも。「即日対応」を打ち出している施設なので、定員はすぐにいっぱいになりそうです。奥田先生は「想像していたよりはるかに早いペース」「20代の入所希望者が多い」「それだけ事態は深刻だということ」。案内して下さった職員の今井和雄さんによれば「若い人には家族がいるが、帰れないでいる。家族との関係の回復、また就労支援にも力をいれていきたい」。

抱樸館の食堂から見える庭には桜の木が植樹されていました。「地域の方が開所式のときに、贈ってくださったものです」と今井さん。「去年、抱樸館福岡建設の話が別の場所で具体的に進んでいましたが、その時は地域の反対でだめになったと聞いています。なぜここでは地域の人に受け入れてもらえたのですか?」と大谷委員長が質問しました。「この地区は部落解放に昔から熱心に取り組んでいる地域で、説明会を開いて、主旨を話すと『それはとてもよいことだ、ぜひみんなで応援しよう』ということになったのです」という答えでした。差別と闘う、というひとつの窓を開いていたこの地域の方々は、その窓を通していろんな痛みがよく見えるんだな、と思いました。そして、教会もそうでありたいな、と。前回の計画への反対理由のひとつは「ここは安心、安全な地域なのに、よそから知らない人が入ってくるのは安全が脅かされる」ということだったそうです。もしかして、教会(私)もそんな風に身構えて心の壁を高くしてないだろうか、と。

委員会の開会礼拝で大谷委員長がマルコ6:30~44節からお話されました。「この箇所では学ぶ本当の奇跡は、パンが増えて大勢の人が満足したことでなく、人間が自分の知恵でなんとかしようとしたとき、イエスが神の力に信頼してでかけていくように人間を押し出してくださったことではないだろうか」と。教会(私)の窓が開かれるとすれば、それは神様の力、奇跡かもしれません。(中嶋名津子)

ホームレス支援教会一覧

当委員会が把握しているホームレス支援を定期的に行っている地区と教会、定期的に炊き出しなどに出かける支援者が所属している教会は以下の通りです。活動の問い合わせ教会のみ電話番号を記しました。当委員会が把握できていない情報、「ここでもやっているよ」「うちでもやっているのので載せてほしい」という情報がありましたら、ぜひ、連盟事務局気付、ホームレス委員会あてご一報くだされば幸いです。尚、ここに記していない教会・伝道所以外にも、献金や物資献品などを通して支援活動をささえてくださっている教会・伝道所が多くあります。皆様の関心とお祈りを感謝いたします。

【東京地区】

目白ヶ丘教会ホームレス支援有志の会

【市川地区】

日本バプテスト連盟市川八幡キリスト教会

047-332-5197

日本バプテスト連盟市川大野キリスト教会

日本バプテスト浦和キリスト教会

【相模地区】

日本バプテスト相模中央キリスト教会

046-274-3708

【岐阜地区】

岐阜バプテスト教会

058-265-0881

【京都地区】

日本バプテスト京都教会

075-231-1351

【平野地区】

平野バプテスト教会

06-6708-5852

日本バプテスト連盟シオンの丘教会

【兵庫地区】

日本バプテスト連盟浜甲子園教会

0798-41-5300

神戸バプテスト教会

神戸西バプテスト教会

神戸伊川キリスト教会

【香川地区】

日本バプテスト連盟恵キリスト教会

087-861-0523

【北九州地区】

日本バプテスト連盟東八幡キリスト教会

093-651-6669

日本バプテスト小倉キリスト教会

南小倉バプテスト教会

日本バプテストシオン山教会

若松バプテスト教会

日本バプテスト枝光キリスト教会

【福岡地区】

日本バプテスト福岡基督教会

福岡西部バプテスト教会

092-323-5151

バプテスト東福岡教会

福岡国際キリスト教会

平尾バプテスト教会

長住バプテスト教会

日本バプテスト連盟宇美キリスト教会

【久留米地区】

日本バプテスト連盟鳥栖キリスト教会

日本バプテスト連盟久留米荒木キリスト教会

0942-27-0116

日本バプテスト連盟久留米キリスト教会

【長崎地区】

長崎バプテスト教会

095-826-6935

【沖縄地区】

日本バプテスト連盟那覇新都心キリスト伝道所

098-942-4775

<冊子が発行されました！>

日本バプテスト連盟ホームレス支援特別委員会編

発言集 2001 - 2007 講演・発題・説教ほか)

『「ホームレス」と教会』(220頁 A5版 700円)

お問合せ・お申込は…下記までお願いします。

